

アタッチメント・ライフ



報告号

第15回 育児セラピスト全国大会 in2024 今年のテーマは「同窓会」



スキルアップ講座

アタッチメント・ベビーマッサージ 全面リニューアル

シンポジウム

基調講演「育ちのなかで生ずる発達の不具合」ほか



一般社団法人
日本アタッチメント育児協会

第15回 育児セラピスト全国大会 in2024

今年のテーマは「同窓会」

P.1 開会のあいさつ

1日目 スキルアップ講座

P.2 アタッチメント・ベビーマッサージ 全面リニューアル

2日目 シンポジウム

P.7 東京家政大学 副学長・名誉教授 / かせい森のクリニック院長

宮島 祐 先生

基調講演 「育ちのなかで生ずる発達の不具合」

優秀実践表彰式・実践発表

P.16 子育て支援 部門 **岩野 しのぶさん**
13年続けてきたベビーマッサージ教室と
親子サロンの活動について

P.18 産前・産後サポート 部門 **佐藤 裕子さん**
地域における助産師としてのベビーマッサージ&ヨガの活動報告

P.21 ランチミーティング


恒例!お悩みスーパーバイズ 2024


P.25 あとがき


資格アイコン

育児セラピスト


 前期課程 (2級)

 後期課程 (1級)


 シニアマスター

 ライフサポーター

エントリー

 アタッチメント・ベビーマッサージ


 アタッチメント・ヨガ(forマタニティ&ベビー)


 アタッチメント・食育

 ベビーキッズ・あそび発達

 プレスクール・あそび発達


 子育てマインドフルネス

 アタッチメント発達支援 アドバイザー

 アタッチメント・ペアレンティング

スキルアップ

 アタッチメント・キッズマッサージ

 アタッチメント・ジム

 アタッチメント心理 カウンセラー

 トレーナー

第15回 育児セラピスト全国大会 in2024

今年のテーマは「同窓会」

開会のあいさつ



第15回を数えた今年の全国大会は、対面とオンラインあわせて100名に届く参加者をむかえて開催することができました。まさに「同窓会」というテーマにふさわしく、わたしにとっても、数年ぶりでお会いした方たちと、お話しできた機会となりました。

アタッチメントアカデミアには入りきれない数の参加者であったため、今回の会場は、文京区の施設「アカデミー茗台」の一室を借りました。この会場は、はじめての利用であったため勝手がわからないことも多々あり、直前までバタバタの中での開会となったことが印象的でした。その緊張感や焦りは、まさに第1回の全国大会を思わせるものでした。その意味で、わたしにとっては、初心に帰る気持ちで臨んだ全国大会でした。

一般社団法人 日本アタッチメント育児協会

理事長

廣島大三



アタッチメント・ベビーマッサージ 全面リニューアル



誕生から18年を迎える今年(2025年)、アタッチメント・ベビーマッサージのカリキュラムを全面的にリニューアルしたのが、今年のスキルアップ講座となりました。この新カリキュラムの制作に取り掛かった当初は、基本路線は変わらず、時代性を加味した加筆修正をする方針でした。

ところが、取り掛かってみると、新カリキュラムは、これまでとはレイヤーが一段上がるような内容となりました。実際に、その講義を終えたわたしは、アタッチメントの解釈と、ベビーマッサージのあり様そのものが、同時にリニューアルされたことに気づいてしまっています。

「アタッチメント理論」ベビーマッサージ・リニューアルの始まりはここから

最初に伝えたのは、アタッチメントにおける「くっつく」は、一般的なスキンシップと区別して捉えるということです。スキンシップは、肌と肌の触れ合いにより親密感や帰属感が高まる一連の「行為」を表します。それに対して、アタ

チメントにおける「くっつく」は、愛情が込められた「くっつき」によって、安心感や自己肯定感といったパーソナリティの土台を育くむ「心理的作用」です。両者は似ているようですが、表している概念のレイヤーが違うのです。

さらに、ジョン・ボウルビイが、心理学に生物学的視点を取り入れた事実についても触れました。これは、今日までアタッチメント理論が評価され続けてきた要因の一つです。この視点を与えたのが、生物学者アドルフ・ポルトマンの「生理的早産」の概念でした。『人間の赤ちゃんは、長い乳児期を、母親からの世話を受けて育つ。この間に社会的、文化的、精神的な学習をする。そうして、ヒトは進化の頂点に達した。』つまりこれは、乳児期のアタッチメントの営みのことを指しています。また、『アタッチメントとは、そもそも赤ちゃんによる危機回避行動である』というボウルビイの主張も、こうした生物学的視点を背景とするものです。

そのほか、新カリキュラムでは、アタッチメント

スタイルについても扱っています。パーソナリティの傾向として、「安定型」のアタッチメントと「不安定型」のアタッチメントについて取り上げ、さらにその形成のメカニズムに触れました。

「発達心理学」は、子育てに何ができる？

あらたにエリク・エリクソンの「ライフサイクル理論」を取り入れ、子どもの発達を概観できるようにしました。ここでは「発達課題」という重要な概念を紹介しました。これは、人生のそれぞれの段階で訪れる課題で、前の課題を獲得できると、つぎの課題にすすめるというものです。目の前の発達課題をクリアしないまま、つぎの発達段階に進んでしまうと、発達に歪みが生じてしまいます。この歪みが「生きにくさ」となって表れます。この発達課題を、乳児期（0・1歳）・幼児期（1～3歳）・児童期（3～6歳）のそれぞれの発達段階別に扱っています。

新カリキュラムの発達心理学では、教育業界で注目されている「非認知スキル」についても扱っています。「非認知スキルとは何ぞや？」から始まり、非認知スキルを構成する5つの要素、そしてジェームズ・ヘックマンが唱える非認知スキルを育てる教育の経済的効果について解説しました。

それだけでなく、非認知スキルの育ちを左右する「体験」の考え方・与え方についても扱いました。ここでは、一般的に言う「体験」ではなく、ドイツ語の“Erlebnis（エアレープニス）”の視点における現象学的体験の文脈で体験を紐解き、それが、実際の幼児期の体験とどのように関連するのかを解説しました。さらに、教育投資としての様々な「体験」について触れ、その「非認知スキルの総仕上げ」として、海外体験をご紹介します。

ベビーマッサージがあたりまえとなった今だから、知っておかなければならないこと

いよいよ、リニューアルしたアタッチメント・ベビーマッサージの内容に入ります。と言っても、基本的な考え方やメソッドは普遍のものです

で、変わりはありません。

今回のメインは、ベビーマッサージが世の中のあたりまえになった今、インストラクターとして新たに知っておかなければならないことについて、まとめました。

例えば、食物アレルギーやアトピー性皮膚炎についての知見は、18年前と今では、変わってきています。

また、当協会のベビーマッサージは、アーユルヴェーダに基づいています。このアーユルヴェーダの基本概論を学び、さらにアーユルヴェーダ・マッサージやオイルについても学び直しました。

さらに、ベビーマッサージの法的解釈について、これまでのカリキュラムで扱ってきた内容に加え、ちまたで聞く「マッサージ」という言葉の使用や「マッサージの施術」に関する実際の現場での事例に合わせた解釈を学びました。

低出生体重児・発達障がい児にも行える多様なベビーマッサージ



今回の新カリキュラムでは、新たに「ダイバーシティなベビーマッサージ」と称して、低出生体重児・発達障がい児にも行える多様なベビーマッサージの手法も紹介しています。

「ベビーマッサージは、生後何か月から行うことができますか？」

「保育器の赤ちゃんに、ベビーマッサージをしてあげることは出来ませんか？」

こんな質問に対して「生後すぐからでも大丈夫ですよ!」「低出生体重児の赤ちゃんでも、保育器の中でも、ベビーマッサージは出来ますよ!」

と、わたしたちはお答えします。

あるいは、発達障がいのお子さんの多動や衝動性は、ベビーマッサージをしてあげると、驚くほど落ち着くということを伝えると、こんな質問が返ってきます。

「うちの子は、マッサージを嫌がります。どうしたらよいですか?」

こんな質問に対して「マッサージが嫌いな子はいません。嫌がっているのは、アプローチの仕方が原因かもしれませんよ。」とお答えします。

しかし、この答えを聞いたからと言って、即実践するには心もとないでしょう。実際これらのケースでは、ベビーマッサージのやり方や手技、アプローチ方法が違います。そうした多様な状況に対応したベビーマッサージのあり方についても学びました。

ベビーマッサージの完結編・アタッチメントの決定版

今回の新カリキュラムは、アタッチメントもベ

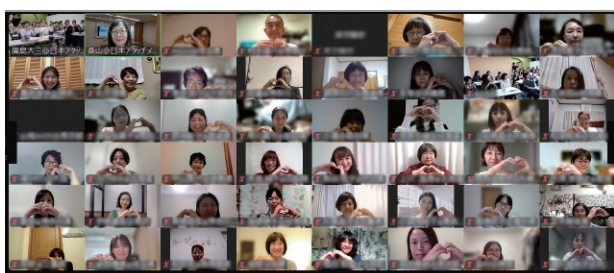
ビーマッサージも、当たり前知に知っている今のお母さんを相手に、アタッチメントの大切さを伝え、ベビーマッサージを教えるために、新たに必要な知識やスキルをアップデートしました。

講義を終えたわたしは、『アタッチメントをより深く理解してもらうことができた』とともに、『ベビーマッサージについて伝えるべきことを余すところなく伝えきった』という確かな実感をえました。

全ての受講生に、それを伝えることができたかどうかはわかりませんが、少なくとも対面やオンラインで直接語りかけた方たちの多くには、確かに伝わったのではないかと考えています。

今回の新カリキュラムをもって、ベビーマッサージのカリキュラムにおける完結編であり、決定版であり、最高峰であると自負しています。

アタッチメント・ベビーマッサージ
インストラクター養成講座
全面リニューアル・0期担当講師 廣島 大三





「アタッチメント・ベビーマッサージ」 受講後の感想

ベビーマッサージのインストラクターになってから15年が経過し、社会やママたちの様子も変化してきています。今回の全国大会は、ベビーマッサージインストラクターのバージョンアップに繋がると思い参加致しました。非認知能力では、自分自身が育った環境、子どもを育てた環境は、非日常体験も結構あったことにホッとしました。2009年ではなかった、アトピーとアレルギー、オイルについてのお話しも新たな学びとなりました。

50代 助産師

今回は新たな学び直しが出来ました。アユルヴェーダに基づくエネルギーの流れ理論、実技の復習は、自分が教室で実践している振り返りや反省も含めて、新鮮な気持ちで受け入れることができて感動でした。来週からのベビマ教室では、今回の学びを新たな気持ちで、お母さん方に伝えていける自信に繋がった気持ちです。更なる10年継続を目標にしていく決心了。ありがとうございました。

60代 保育士

今回の受講を通して、アタッチメント・ベビーマッサージを行うことにより、得られる効果が赤ちゃん、お父さん、お母さんに限らず、幅広い年代層や多様な特性を持った対象に対しても期待できるということが、一番の学びであった。初回受講以降、我が子にアタッチメント・ベビーマッサージを継続的に実践しているが、親子共に身体面・精神面での効果を実感している。知識だけでなく自らの体験も踏まえて、赤ちゃんとお父さん、お母さん達にアタッチメント・ベビーマッサージの良さを伝えていきたい。

30代 助産師

まだ運営などの予定はありませんが、こうして勉強する事でお母さんたちのサポートをしてみたくなりました。また、「アタッチメントライフ」をまだ見た事がないので、みなさんがどのように活動しているのか、お母さん向けのテキストなどもどんな感じに用意されているのかなど覗いてみたいと思います！

50代 保育士

今の自分の教室運営に、マンネリ化を感じていましたが、内容の見直しをどうしたらよいか、具体策が見つからず、壁にぶつかっているところでした。新しい内容を学びたかったことと、自分の問題点を探る手掛かりになればと、受講を決めました。始めた初期の頃は、自分も一生懸命で、私自身未熟でも、一緒に子育てを応援したい気持ちが強かったのですが、様々な方と関わるうちに、当たり障りのないことをメインに考えてしまって、お母さん同士の交流の場を作ることに消極的になっていました。より丁寧に、その子に合ったやり方で。それは教室運営にも当てはまると改めて感じました。アタッチメント理論を生かして、もう一度、プログラムを見直し、やり直す機会になりました。受講して本当によかったと感じています。

60代 保育士

この度は素晴らしい学びの機会をくださり、ありがとうございました。2018年に初受講して、昨年2023年にベビーマッサージ教室を開業してから手探りでやってきた事を見直すきっかけにもなりました。マッサージのインストラクションに関しても、もっとゆっくりで良かったとか、今までの言い回しだと伝わりづらかったかな等たくさん気づきがありました！特に、新しく教えていただいたパートの「ダイバーシティなベビーマッサージ」の所のはじめのアフォーメーションで、ただ触れているだけで良いというのがとても印象的でした。

40代 会社員

理論など、時間が経って曖昧になっていた知識を整理できた。次回から自信を持って話ができそう。…実は職場の事情で、ベビマ教室を続けられなくなってしまい、今年で終わらせなくてはならなかった。せっかく再受講もしたのに…とても残念だが、今回第二の人生で子育て支援をやってみえる方が多いことを知り、そうか！私もまたいつか、やりたいなと強く思った。どこかで母子と繋がりが、親子の愛着形成に関わることを自身のライフワークにしたいと思った。

50代 看護師・助産師

このほかのご感想は
こちらからご覧いただけます！





「アタッチメント・ベビーマッサージ」 リニューアルについてのレポート

講座の最初に、広島理事長が質問に答えるコーナーがすごくよかったです。セサミオイルのアレルギーの話や、アレルギー反応の即時型と遅延型の話は興味深く、知っているのと知らないのではお客さんに話をする際にすごく大きな差があるなど感じました。私は実はゴマアレルギーがあります。そんなに酷くないですが、胡麻豆腐などは食べたら少ししかゆくなります。でも、どんなにセサミオイルを使ってもアレルギー反応は出ません。その理由がわかりました。ゴマの周りのタンパク質部分が精製過程で除去されることも今回初めて知りました。マッサージ実践の部分では復習でしたが、慣れで言い忘れていたことなどを改めて確認できました。また、新生児、低出生体重児へのマッサージや発達障がい児のマッサージを知り、新たな分野への視野が広がりました。というのも、私は肢体不自由児の特別支援学校で教師をしていたので、最重度の寝たきりで医療的ケアの必要な児童に対して、アタッチメント・ベビーマッサージを親子、または教師がしてあげられないかと思っていたところだったので。今回受講して、現実にできそうな、やっていきたい! という気持ちが膨らみました。 40代 ベビーマッサージインストラクター

『マイアミ大学 タッチリサーチ研究所』の研究から、火傷の子どもにマッサージをすると、治癒が早くなることを聞き、マッサージで免疫が上がることは知っていたが、本当に治癒が早まることに驚いた。アメリカのマッサージの現状と日本を比較し、誰でもマッサージを行える環境で、親の意識もマッサージに向いているのもいいが、インドのように生活に根付くまでマッサージやアタッチメントが浸透していくといいと思った。また、その一端を担えればいいとも思った。新生児、低出生体重児へのマッサージは頭と背中に手を置くと落ち着くと聞いて、子育てや仕事を思い出し、確かに落ち着くなと納得した。低出生体重児へのマッサージもできるのに驚き、どれほど小さくても触れ合いを求めているのだと思った。発達障がい児へのマッサージは仕事を思い出し、あの時は偶然行ったわらべうたをその子が気に入り、お母さんも家でやっていると聞いて嬉しかったのを思い出した。今後もその子たちに合ったマッサージを丁寧に探していきたい。 30代 保育士

今回の再受講では、前回の受講から時間が経過しており、自身の知識・技術のブラッシュアップを目的としていました。また、特に新生児や低出生体重児、発達障がい児へのマッサージについての内容を興味深く受講しました。自身が助産師として、産科病棟にて新生児やNICU 収容児へのケア、その両親へのケアに携わっています。NICU 収容児は、母子分離状態であり、愛着形成のためのケアが求められます。コロナ禍でも可能な限り面会機会を持つよう施設基準も再検討しながら対応していますが、限られた面会時間となっています。その状況でも、有効な母子の愛着形成にアタッチメントのケアが活用できないかと思っていたところで、今回の『手をおいて、体温を伝えるだけでも有効』なアフォーメーション、可能な範囲でのマッサージの方法は、明日からでも活用できると思いました。赤ちゃんに触れること、その方法を母に伝えて実践してもらうことで、今我が子にできることが一つでも増えたと実感でき、それが良好な母子愛着形成に繋がっていくと思います。明日からの母子ケアに導入していきたいです。 40代 助産師

今回、今までになかった皮膚トラブルについての記述が増え、更に自分の中の知っている知識や、実際に経験した事柄などと照らし合わせたことで理解が深まりました。また、アトピーとアレルギーを切り分けるという事や、発疹の出方によっては原因が違うことなどもよく理解することができました。全体的に情報量が増えたこと、新しく低出生児や障害を持つ赤ちゃんたちへのダイバーシティなベビーマッサージなど、新たに入り、昨今必要としている情報が得られたことはすごく良かったです。有難うございました。 60代 保育士

リニューアルした講座の
レポートはこちらから
ご覧いただけます!



2日目 シンポジウム

基調講演

「育ちのなかで生ずる発達の不具合」



東京家政大学 副学長・名誉教授 / かせい森のクリニック院長

みやじま たすく
宮島 祐 先生

昨年からお願っていた講演が、ようやく今回実現しました。東京家政大学 副学長・名誉教授にして、かせい森のクリニック院長として発達神経外来を率い、多くの発達障がい児とその親や養育者と日々向き合っている宮島 祐先生による講演です。

わたしは、宮島先生と考え方や信念が近いと、当初から勝手に思っておりましたが、事前に、打ち合わせがてらお食事をご一緒してお話しさせていただいたときに、この直感に間違いがなかったことを確信しました。そんなこともあり、今回の講演を一番楽しみにしていたのは、主催者のわたし自身でした。

アタッチメントもベビーマッサージも触覚からはじまる

最初にお話しいただいた「五感の発達、大脳・脊髄・末梢神経の繋がり」についてのお話は、わたしたちベビーマッサージを教える育児セラピストにとって、非常に興味深いものでした。

皮膚感覚には、触覚・痛覚・温覚・圧覚・冷覚の5つがあり、触覚がもっとも早く発達します。その皮膚感覚における胎児から新生児にかけての発達のメカニズムを、脳科学の視点を交えて解説いただきました。

その上で、ベビーマッサージにおいて最も関係する「触覚」についての話につながります。「触覚」は、私たちが感じる最初の感覚です。全身の皮膚で感じる感覚で、痛み(痛覚)・温度(温覚・冷覚)・圧力(触覚・圧覚)の情報を脳で受け取ります。この触覚は、体のイメージや情緒、対人関係など、赤ちゃんの育ちにおけるあらゆることに影響すると言います。たしかに、アタッチメントにおける“くっつき”と、そこから生まれる“安心感”は、まさにこの触覚によって成立していることを考えると、大いに納得できます。

医学からみた赤ちゃんの視力と視機能の発達

五感のつぎは「視覚」です。赤ちゃんの視機能について、「選好注視法」という赤ちゃんの視力を推測する技法における、月齢による視力の発達の推移を示していただきました。これによると、生後1か月の赤ちゃんは、明るい方を見るくらいの視力だったのが、6か月のころには0.04～0.08に、1歳で0.2～0.3、3歳で1.0以上、6歳で1.0～2.0で完成すると言います。

視覚の未発達な赤ちゃんは、物を見ることで視機能が発達し、やがて両目で同時に見た情報を脳で処理して遠近感や立体感を知覚するようになり、さらに高機能に発達します。そのため、弱視は3歳までに発見し治療することが重要だそうです。



こうした医学的な解説は、わたしたちの実践での経験とピッタリ符合することがわかります。例えば、対話読み聞かせで「白黒赤えほん」を見せることは、物を見ることで発達する赤ちゃんの視機能において有効であることがわかりますし、赤ちゃんがお母さんを認識し後追いがはじまる8か月のころというのは、0.08という視力が得られたことと関連することがわかります。宮島先生の医学的視点は、わたしにとって、とても興味深い発見でした。

アタッチメント理論と脳の発育

アタッチメント理論と脳の発育の関連性についても、解説いただきました。わたしたち育児セラピストにとっては、もっとも興味深いところです。

出生から6か月ごろの第1段階・第2段階におけるアタッチメントの育ちにおいては、「生きるための脳」である脳幹と大脳辺縁系の発育との関連がみられます。この段階の赤ちゃんは、本能的なアタッチメント行動をしめすことと符合します。

つぎに、6か月～3歳ごろの第3段階のアタッチメントに入ると、大脳皮質や小脳といった「人間らしさの脳」が関連してきます。自分をよく世話してくれる人と、見知らぬ人を区別するようになり、アタッチメント行動は、感情交流をともなう相互作用に発展し、やがてお母さんを安全基地とみなすようになり、パーソナリティを形成してゆきます。

第4段階の3歳以降というアタッチメント完成の時期に入ると、「より高度な人間的な機能をつかさどる脳」として前頭葉の発育が関わってきます。お母さんが、目の前に居なくても、自分の中にお母さんをイメージすることで、安心を得る高度なアタッチメント行動をしめすようになります。お母さんと離れていても大丈夫になることによって、子どもは探索行動に出るようになり、それが知能の発達を促し、さらに高度な認知を獲得してゆきます。

タッチによって起こる親の感情

さらにアタッチメントの文脈で、とても興味深い考察がありました。

親が子どもに触れたとき、親に起こる感情は、タッチする部位によって違うのだそうです。この考察によって、ベビーマッサージをしているとき親の感情や気分の傾向が、どのように移り変わるのかを確認することができます。

「お尻」のマッサージは、柔らかくてさわり心地がいいと感じ、おむつ替えを想起したりもします。「背中」のマッサージは、優しい気持ちになり、感謝や幸せ、喜びや安心を感じます。「生まれてきてくれて、ありがとう」などと声かけすると、感情と言葉がリンクするでしょう。「脚」のマッサージは、ムチムチしていて、かわいいという気持ちが起こります。「足」のマッサージは、うれしい気持ちや喜びが起きます。「腕」のマッサージは、落ち着いた気持ちにさせてくれて、「手」は、うれしい、愛おしい気持



んたちに起こる感情の変化や推移を、より論理的に実感することができました。

ちになります。「おでこ」は、愛おしい気持ちでキスを想起させます。ほっぺや口まわりの「顔」は、安心やほっとする気持ちにさせてくれます。「耳」は、かわいいという気持ちが起きます。

ベビーマッサージ教室では、お母さんたちのこのような感想を聞くことは、実際に多いです。一方で「触れる」ことと「脳における反応」の観点でも、部位ごとに違う傾向が見られることを科学的に知ることによって、ベビーマッサージをとおしてお母さん

五感の発達は幼児期の子どもの脳を活性化する

五感の刺激は、シナプスを増やします。シナプスが増えるということは、脳の中の神経細胞が、シナプスを介してより複雑に、より高度につながり合うということです。このようにして、幼児期は脳が急速に発達します。それはやがて「頭がよい」とか、「情緒が豊か」という要素につながってゆきます。

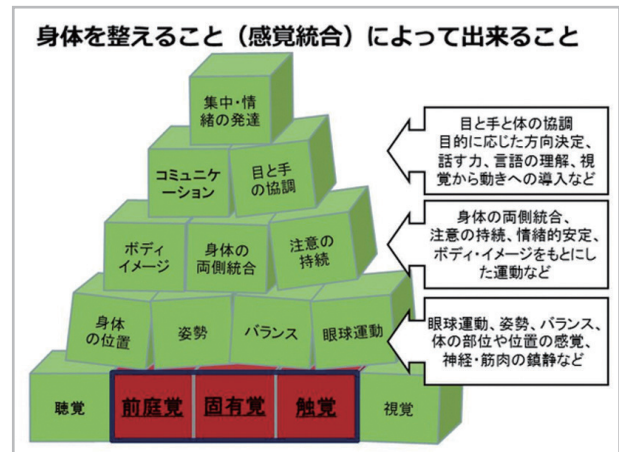
こうして五感が発達する過程で、わるいことよりも、よいこと、「これでいいんだ!」という感覚を積み重ねること（正の強化）が、重要です。それによって発想力・直観力・危機回避能力・情緒・表現力といった能力の高度な育ちにつながると言います。幼児期においては、褒める・叱るという親の接し方も、影響すると宮島先生は言います。

余談ですがこのお話は、近年の教育分野で話題の「非認知能力」の育ちと言い換えることもできます。

このように子どもの発達に大きな影響を与えるのは、五感の中でも、触覚と視覚であり、特に触覚（とそれともなう固有覚・前庭覚）が子どもの発達に果たす役割は、われわれが思っている以上に大きいそうです。このあたりの内容は、「アタッチメント発達支援」講座でも、まさに同じ文脈で扱っていますので、受講された方には馴染み深い内容だと思います。

ベビーマッサージや対話読み聞かせによって、「頭がよくなる」とか、「やさしい子に育つ」と私たちが伝えていることは、脳科学においても、その明確な根拠が見いだせると言えそうです。

右図を見ると、「身体の位置」→「ボディイメージ」→「コミュニケーション」→「集中・情緒の発達」というように、上に向かって高度になっていますが、それらすべてを支える土台が「五感」であり、なかでも重要なのが、触覚とそれに付随する固有覚・前庭覚となっていることがわかります。



引用：web.kansya.jp.net

子どもの特性？障害？

ここまでの序章のお話で、ここからは、宮島先生が長年取り組んでこられた臨床の話に入ります。宮島先生は、最初に

「発達障害」とは、生まれつきの「特性」で、「病気」とは異なる

という定義を示されました。ここで「特性」という言葉を使うことで、ネガティブな印象を与えることがないという先生の思いがこめられています。幼児期においては、病名ではなく、その子がどんな特性を持っているのかが重要だと言います。

発達障害は、生まれつき脳の一部の機能に障害があり、そうした機能不全には様々なタイプの特性

があり、同じ人にいくつかの特性がオーバーラップするため、同じ診断名がついている人同士でも、個人差が大きく、まったく似ていないように見えることがあるそうです。

親御さんは、診断名を欲しがりますが、宮島先生は、診断名ではなく、「この子がどんな困り感をもっているか?」ということに注目してもらおうようにしているそうです。とくに4～5歳期の子どもにおいては、支援者がこの視点を持っていることが、とても重要だと言います。



乳児期の発達障害

触覚や聴覚における感覚過敏はないか? 触られることや抱っこに対して、過敏な反応を示したり、音がするとすぐに起きてしまったり、音に対して過敏に反応する傾向はないか。

コミュニケーションスキルとしての言語はどうか? 喃語が少ないとか、相手の言うことを真似して返す(反響言語)をしないということはないか。

アタッチメントにおける対人関係の違和感はないか?

こうした特性においては、親が思ったように子どもが振舞ってくれないことが多く、ある種の育てにくさが生じることがあります。すると子どもに対して、さまざまな「ダメ」とか「○○しなさい」などの否定語を使ってしまう傾向があります。

こうした「叱られ体験の積み重ね」は、子どものなかに「居づらさ」を生み、いつまた叱られるかという「恐怖心」を植え付けてしまいます。それらが高じるとトラウマやフラッシュバックになることがあります。そうすると、思い出すと体がすくむ、似た声を聞いたり、似た外見の他人を見ても固まってしまうことさえあります。

そのような環境に育った子は、自分はダメな人間だと思ってしまい、自尊感情が低い傾向もみられます。そうした傾向が、自分よりも弱い相手探しをすることで出てきてしまい、いじめにつながることも考えられます。実際、先生が会長を務めていらっしゃる「いじめ問題対策審議会」において、『いじめが起こった時には、「いじめた側」の子どもに環境に、殺伐としたものがないかどうかを見極める』ことの重要性を先生は指摘されました。これについては、別分野から参加されていた弁護士や、哲学者の先生からも、大いなる共感と賛同を浴びたそうです。

子どもの発達と行動の診立て方



知能検査について、乳幼児期には親に対して行う「質問紙法」があります。3～6歳に対応した検査として「新版K式(京都式)」「田中ビネー式V」、さらに6歳以降に対応するのが、世界的に知られている「WISC-IV」です。こうした知能検査とともに、心理検査の結果などを総合的に解釈して発達障害を診断します。

しかし、これだけでは材料不足だと先生はおっしゃいます。そこで、子どもに絵を描いてもらう「描画法」(バウムテスト・HTP・人物画など)や、文章を書いてもらう「投影法」(文章完成法・SCTなど)によって補完して、総合的に解釈する必要があるそうです。ちなみに宮島先生の外来では、幼児がよりストレートに表現できる描画法を採用しているそうです。

「発達障害」用語の問題

宮島先生は、言葉の使い方に信念と方針を持っておられる方だと、わたしは感じています。じつは、わたし自身も、同じような“こだわり”を持っているため、大いに共感した次第です。

宮島先生のそれは、「〇〇障害」と医学用語を使って伝えられた時の子どもの気持ちを慮ったものでした。「害」という言葉の語感が、ひっかかるわけです。

英語では“Disorder”、Disは「非（ではない）」を表し、Orderは「秩序、規律」を表します。直訳すると、「きまり通りではない」となり、そこからは障害という意味合いを見つけることは出来ません。むしろ「非定型」という言葉の方が、はまる訳なのではないか、と指摘されます。わたしも全く同意見です。日本語訳に違和感があったとき、語源から当たって、再解釈をするアプローチは、概念の理解に非常に役立ちます。

実際、医学界でも「しょうがい」「障がい」「発達凸凹」などと表現する動きがあるそうです。実は、わたしも同じ“こだわり”を持ってきました。わたしのルールは、病名など用語として使う場合は「発達障害」、「発達障がい児」など子どもに使うときは「がい」で使うようにしています。

先生は、この発達障害という言葉の背景には、実生活で「支障・問題」があるかどうか、という視点が含まれることも強調されていました。

診断の名称についても「自閉スペクトラム症」や「注意欠陥（欠如）多動症」のように、「症」を使い、「障害」を使わないことが多いそうです。さらに、語感のネガティブさをともなうので「欠陥」と言わず「欠如」を使うようにしているそうです。

また、別の視点で言うと、「自閉スペクトラム症」や「注意欠如・多動症」の特徴は、ある分野においては、優秀さとして現れることもあるため、「障害ではなく、財産である」と先生は強調します。

「その子に生きにくさがあるのなら、その気質にどう適切に介入したらよいかを考える必要があります、それが医者役割です。“こだわり”も、見方を変えれば才能になります。それを見つけてあげるのが大人の役割です」

これは、とてもステキな視点であると同時に、まぎれもない事実だと、わたしも思います。



宮島先生流・薬物療法の基本的考え方

「薬物療法は、否定するものではないが、問題を解決するものでもない」という前提のもとで、宮島先生は、薬物療法に独自の見解をもって対処していらっしゃいます。

1. 薬物は「発達障害」を治すのではない
2. 「その気になった」こどもの成功体験を増やす
3. 薬物が子どもにとって利点があるかどうか

上記の観点から子どもを診たとき、他者に対して、①他害行為や②他人に不快・不安を与える行為があったり、または自分に対して、③自傷行為や④自尊感情の低下が見られたり、あるいは身体症状として、⑤睡眠・覚醒サイクルに異常がある場合に、薬物療法の検討をおこなうそうです。その際、まずは薬を使わないで出来ることを試した上で、解消されない困りごとに対して適時取り入れます。

子どもと対話するときのアプローチとして

発達障がい児の療育のなかに「応用行動分析」という手法があります。ある行動に対して、まわりの環境がどのように作用するかを分析することによって、実社会で生じる問題の解決に応用する理論と実践の体系です。これは、感情や心理ではなく、行動という事実の積み重ねに注目した手法と言えます。

注目するのは、「誰にとって」「どんな」問題が生じているかで、①他者を巻き込み周囲の活動を制限する行動、②本人の学習や社会活動への参加を妨げる行動、③他者や本人に危害や損害を及ぼす行動、という観点から解釈します。

分析は、先行事象：A (Antecedent) → 行動 (反応)：B (Behavior) → 結果 (後続事象)：C (Consequence) というように順番に事実を積み重ねていく ABC フレームの手法を用いておこないます。

宮島先生が、この ABC フレームをつかってヒアリングした内容を、カルテ記載する際に心がけているのは、子どもに「5W1H」で質問することだと言います。

When：いつ・Where：どこで・Who：だれが・What：何を・Which：どのように、どのような方法で・How：どうした、どうなった

これらの質問に対する子どもの答えを文章にして、ABC フレームに乗せれば、応用行動分析になります。

わたしは、このアプローチは、実際それほど難しいものではないが、効果は絶大なものだと感じました。たとえば、保育士が子どもに、問題が起きた事情を聴く場面が考えられます。ここで、感情や心理作用に注目せずに、「5W1H」の質問から、事実の積み重ねをおこない、問題を把握します。



結果としてそうなっているのではなく、これを意識して行うことが重要です。

事実の積み重ねによる問題把握ができれば、それが起きないように環境設定が可能になります。発達障がい児は、本人が意図せず衝動的にやってしまう「行動」によって問題が起きたりします。それは、行動と反応の組み合わせが問題であっただけです。そもそも、その組み合わせが起きないようにすれば、子どもが傷つくことなく、問題の根本解決につながるのではないのでしょうか。

ペアレントトレーニング

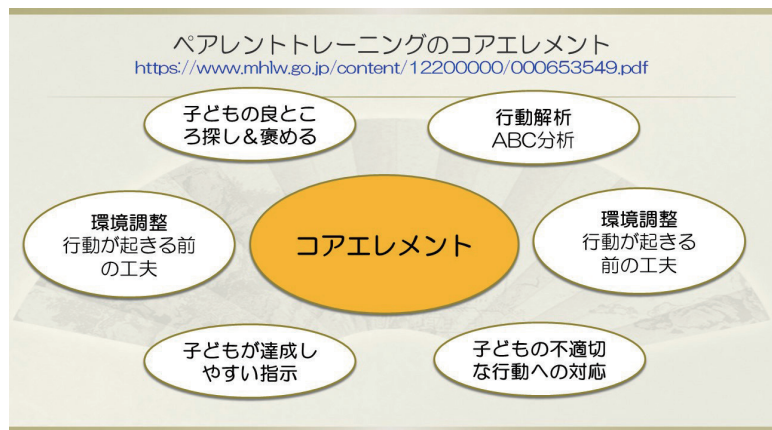
ペアレントトレーニングとは、保護者が、子どもの「褒め方」や「指示の仕方」に関するスキルを身につけるプログラムで、1960年代アメリカが発祥です。日本では1990年代から、盛んに研究されるようになりました。

ペアレントトレーニングには、6つのコアエレメント（中核要素）があります。

行動分析（ABC分析）・環境調整（行動が起きる前の工夫）・子どもの不適切な行動への対応・子どもが達成しやすい指示・行動3分析（好ましい／好ましくない／許しがたい）・子どもの良いところ探し&褒める

好ましい行動は、褒めることで肯定的な注目をします。逆に、好ましくない行動は、無視する＝待つことによって、中立的立場から注目を取り去ります。危険な行動や許しがたい行動に対しては、制限を設けたり、公正な態度・毅然とした態度をもって、非身体的制限を加えます。

こうして、親が「自分の子どもに対する最良の理解者」になる。これは年少ほど効果的です。これを二宮尊徳に言わせると「可愛くば五つ数えて 三つ褒め 二つ叱ってよき人となせ」となります。



子どものやる気が起こる言葉かけ

われわれ大人は、「〇〇なさい」の言葉かけをしてしまいがちです。しかしこれは、子どものやる気を削ぎ、自主性を妨げる言葉かけです。代わりに・・・

「いっしょに」「楽しい」「子どもが興味を持った」というコンセプトで言葉かけをしたらどうでしょうか？

「早く寝なさい!」ではなく「早く起きたら、楽しいことをしよう」という言葉かけに替えてみるとします。すると、そのために「早く寝る」と自分が決めることになります。つまり、楽しい約束のために、自分が決めたことを実行する／その実行は認められ賞賛される／というメカニズムが働きます。

このような「前もっての約束」の成立には「共感性・共有」「需要・認める」という前提が必要不可欠であり、それが「達成感」につながります。言葉かけひとつにも、このようなメカニズムが働いて機能していることを、大人は知っておく必要があります。



発達障がい児のことを周囲の子どもに説明するとき

まず、「発達特性」の説明をします。その際、事前に保護者と本人の承諾を得るのは不可欠です。診断名は必要ありません。大事なのは、その子の「得意・不得意」を、子どものわかりやすい言葉で伝えることです。

つぎに「行動の問題」の説明をします。これは、共感性・共有・受容の気持ちをもって行います。その子の問題行動は、「わざとではないこと、悪気がないこと」、行動の理由は「気持ちが落ち着かないためであること」、そして「困ったら大人に言ってきて良いこと」を伝えます。

最後に「対応方法」を説明します。ここで大事なものは「具体性」です。「〇〇くんにこうしてあげて・・・」と具体的に対処方法を伝えます。この具体的な対処法が、あればあるほど、子どもはやりやすくなり、良い状況が生まれます。

「しつけ」とは？

躰

和語で、美しい「身」と書きます。これは、ヒトとしての在り方をあらわしています。親の美しい振る舞いを、子どもはジッと見ている。そうして、見られていることに気づくことが大事です。

子どもが親（大人）の真似をして、やがて自分のものにした（身についた）とき、子ども自身に達成感が得られるのではないのでしょうか。料理を作る、字を書く、絵を描く、時間を守る・・・そうした一つ一つのなかで、起こることです。

「発達しょうがい」早期診断のメリットは？

発達障害における診断は、「障害」を見つけるためではありません。診断名をつけるためでもありません。診断したら薬で治る・・・わけでもありません。

親御さんからよく聞かれる質問があります。

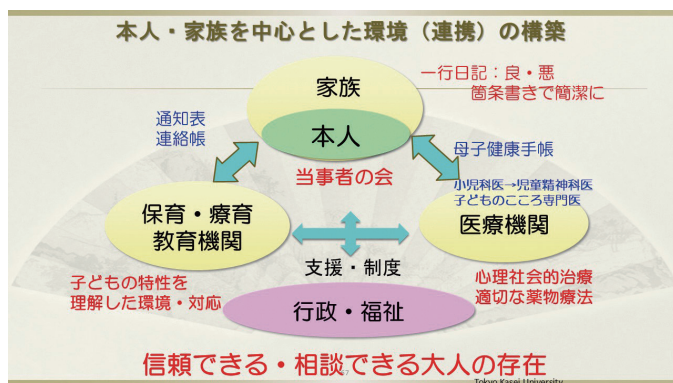
「普通になりますか？」

先生は、こう返します。

「普通って何だと思いますか？」「お子さんに何を望みますか？」

宮島先生は、「医者が早期診断をする本質的な命題は、子どもの特徴（個性）を理解し、伸ばすためであり、二次障害でうつになったり、不登校になったりすることを防ぐためなのだ。親御さんへの問いを通して、この本質を考えてもらうきっかけになれば」とおっしゃいます。

本人・家族を中心とした環境（連携）の構築



発達障害は、「本人」を中心に「家族」がもっとも重要な役割を果たします。家族が不安定になると、そのしわ寄せは本人にいてしまいます。その意味で、家族のサポートを「保育・療育・教育機関」が担い、子どもの特性を理解した環境づくりや対応をおこないます。その指南役として「医療機関」があります。

最後に、左の図が表わすとおり、「本人・家族」「保育・療育・教育機関」「医療機関」それぞれが連携することによって、「信頼でき

る・相談できる大人の存在」が、社会の中で機能します。

(文責) 一般社団法人 日本アタッチメント育児協会
理事長 廣島 大三





基調講演 聴講後の感想

宮島先生のご講演は、今の仕事にとって大変学びの深いものでした。

医学的内容は、自身で勉強するには深すぎて難しいものですが、それをわかりやすく解説してくださり目から鱗の内容でした。

そして自身で学んできた知識をより深く落とし込むことができ、今後の活動への影響も大きいです。

特に、今回質問させて頂いた「添い乳」のご回答で医学的観点からのお話と、廣島先生からの心理学的観点からのお話は現場で多に役に立つ有難いものでした。ありがとうございました。

親子教室 50代 東京都

発達に不具合がある子どもたちと関わるなかで、その子がその子らしく生きていけるように、私たちがどう関わればいいのか、そして保護者にどのように伝えていったらいいか、改めて学び直す機会になりました。発達障害は診断が簡単ではないことは知ってしまいましたが、宮島先生のように親身に丁寧に関わってくれる医師がもっといたら、救われる子どもたちも多いのにと感じました。

助産師・非常勤講師 30代 栃木県

発達神経外来の宮島先生のお話は、診察されたお子さんの事例を交えながら、非常に興味深く、また多くを学ばせていただきました。先生が仰っていた、「その子の気質に我々がどう関わるか」「グレーゾーンではなくパステルゾーン」「こだわりは世の中の財産になりうる才能である」などのお言葉から、大変多くの気づきを得ました。

発達に関するお話を通じて、改めて胎児期や乳児期が、いかに重要な時期であるかを痛感し、その乳幼児期に私が関わっていることの重大さを再認識し、身が引き締まる思いです。気になるお子さんを見つけた時には、その子をしっかりと理解した大人として受け入れていきたいと思いました。

また、「発達しょうがい」の早期診断についても学びました。保育士の私にとって悩みのひとつでしたが、それは、子どもの特徴（個性）を理解し、伸ばすための始まりであり、家族にとって大切なことに気づくはじまりあることという言葉も感銘を受けました。講演を通じて、保護者の思いにも耳を傾け、寄り添いながら一緒に考えていきたいと強く感じました。

このように、多くの学びと気づきを得られたことに感謝いたします。ありがとうございました。

保育士 50代 大阪府

気になる子を見る目。診察するときは入室から観察するとおっしゃられていたので、その子だけでなく、広く目を向けて色々な角度から観察、情報収集をしてみると見えてくるものがある、ということ。また、発達検査の違いなど、専門的なお話を聞くことができ、今まで感じていた就学支援検討会の中でのモヤモヤが解決しました。その子の得意なことを見つけ、サポートできる保育者でありたいと思いました。今日は貴重なお話を聞くことができ、大変有意義な時間となりました。ありがとうございました。

認定こども園保育士 50代 新潟県

昔覚えた発達障がいのとらえ方や用語がすごくわかってきていることに驚きました。すごく勉強になりました。グレーゾーンじゃなくて「パステルゾーン」だったり、「その子に不利益が出ているかどうか」が大事ということが目からうろこでした。

子育て支援事業 40代 兵庫県

時代の変化とともに、環境が変わり、親としての関わりの違いも生じてきていると思います。発達障がいという言葉が一人歩きをしていて、気になる子供、私の孫も含めて医学的立場から学んでみたいと思いました。

保育士 50代 熊本県

とても良いお話を聞かせて頂きました。“約束は対等であること。大人だから命令していいのではない”、“躰”とは。“成功体験”を増やす。“こだわりは才能”。見方を変えることの大切さ。

看護教育と通じるものだと思います。“また来たい”と思えるように楽しい話ができるようにするのはベビーマッサージ教室に通じるものがあると思いました。

看護師 60代 徳島県

このほかのご感想はこちらから
ご覧いただけます！



優秀実践者表彰式・実践発表

子育て支援 部門

岩野しのぶさん

65歳のハリキリおばあちゃんが語る、
ベビーマッサージと地域支援の歩み

取得資格



保育士から異業種へ、そして再び保育の道へ

岩野さんは45年前、保育士・幼稚園教諭の資格を取得し、福岡市の認可保育園で保育士としてキャリアをスタートさせました。その後、結婚・出産を経て育児に専念しますが、やがて子育てをしながら社会復帰を考えるようになりました。3人目の出産後、保育士としてのキャリアを再開する選択肢も考えましたが、「一般企業で自分を試してみたい」という思いがあったため、異業種の保険業界へ進まれました。保険の営業職を10年間勤めた後、再び保育士の道に戻る決意を固めました。再挑戦したのは、子どもと向き合う仕事が自分の本分だと感じたからです。

ベビーマッサージと子育て支援活動の開始

保育と幼児教育に携わる中で、岩野さんはベビーマッサージの重要性に気づくようになりました。ちょうどその頃、友人を通じて、伊万里市のイベントでベビーマッサージ教室の話が持ち上がったのを機に、日本アタッチメント育児協会の本部のあった名古屋まで出向いて、アタッチメント・ベビーマッサージの資格を取得しました。このイベントは当初、一回限りで終わる予定だったのですが、参加者から好評だったため定期化されることになりました。これが現在も続いており、13年目を迎えます。

ベビーマッサージ教室を通じて、岩野さんは「アタッチメント理論」と「安全基地」の考え方を広め、親子の絆を深めることの大切さを伝えて

います。

「ベビーマッサージは、ただのマッサージではなく、親子の絆を深める大切なコミュニケーションの手段である」と岩野さんは強調します。乳幼児期の子どもの育ちにおいて「アタッチメント（愛着）」がいかに重要であるかを、お母さんに実感してもらうとともに、レッスンを通して「触れることの大切さ」を伝えています。

産後うつのお母さん支援として「ぞうさんサロン」立ち上げ

ベビーマッサージ教室を立ち上げた1年後、同じ伊万里市から委託を受けた別事業として、産後うつのお母さん支援を目的とした親子サロン「ぞうさんサロン」を立ち上げました。ここでは、母親が孤立することなく、他の親たちと繋がり、支え合う場を提供しています。特に、1人（ワンオペ）子育てが負担になっているお母さんたちにとって、安心して集える場所になっています。

「ぞうさんサロン」の特徴は、その気軽さです。参加するのに予約は必要なく、いつでも訪れることができるようにしています。この気軽さが、お母さんたちにとって大きな魅力となっています。また、サロンは、お母さんたちがリラックスできる空間となっており、ベビーマッサージや子育てアドバイスを提供しています。

孫との触れ合いと心の成長

岩野さんは、8人の孫を持つおばあちゃんでもあります。孫たちには全員、みずからベビーマッサージをして、触れ合うことの大切さを伝えてき

ました。孫たちが大きくなった今も、マッサージは大切な役割を果たしています。思春期に差しかかっても、マッサージを求めてくることがあるので、頭や顔、足をマッサージして、孫との心のつながりを深めています。

特に印象深かったのは、早産で生まれた孫がICUに入院していたときの事です。親子の絆を強めるために、退院準備の際に行ったカンガルーケアを通して、赤ちゃんが見せた笑顔が、岩野さんにとって忘れられない思い出となっています。こうした実体験を教室で参加者に伝え、「触れること」の重要性を伝えています。

地域への貢献と教室の継続



「今、この時から、触れてあげましょう。

人間の土台づくりをしていますよ」

現在、岩野さんは企業主導型認可保育園で園長として働きながら、ベビーマッサージ教室を続けています。「参加者が1人でも続ける」という強い信念を胸に、教室を立ち上げ、今もその活動を継続しています。

参加者から感謝の言葉を受ける度に、元気をもらい、それが活動を続ける原動力となっています。また、子どもたちを見守ることで、子育て支援活動における深い実感を得ています。

岩野さんが最も大切にしているのは、「心の土台作り」としての触れ合いの重要性です。肌に触れることは、単に身体的なケアにとどまらず、心を育む行為であると岩野さんは確信しています。「皮膚は第2の脳」とも言われるように、親子の触れ合いは、子どもの情緒や発達に深く関与しています。子どもたちが成長する過程で「肌に触れること」が心の発達にどれほど影響を与えるか、その重要性を、わかりやすく、おしゃべり感覚で伝えています。「今、この時から、触れてあげましょう。人間の土台づくりをしていますよ」と声かけをして、お母さんたちに、触れることの大切さを届けています。

今後の展望と未来への意欲

「70歳を過ぎてもこの活動を続けたい」「これからお母さんの心に寄り添い、手助けをしていきたい」と語る岩野さんは今後も、多くの親子に温かな手を差し伸べ、子育ての力強いサポートを続けていくことでしょう。

広島からひとこと

「地域のハリキリおばあちゃん」として活動する岩野さんが、子育て支援に取り組む姿が印象的でした。「第2の人生」として、子育て支援をライフワークとし、地域に貢献して、イキイキとしている岩野さんの話を聞いて、私も子育て支援の重要性と、その活動がもたらす喜びを再確認しました。

岩野さんの発表で印象深かったのは、8人のお孫さん全員がベビーマッサージを経験しているということです。思春期に差し掛かった孫たちが「顔や足をマッサージしてほしい」と祖母にリクエストする姿は、家族の絆を深める素晴らしいエピソードです。

岩野さんが孫たちや、ベビーマッサージ教室に通うたくさんの親子と築いてきた「触れ合いの関係」は、ポジティブエネルギーの交換であり、まさに幸せの象徴です。「第2の人生」において、このような充実感を得られる活動にいそしむことは、地域貢献というだけでなく、生きがいと未来への展望をもたらします。

私も人生の後半に入った一人として、岩野さんのように、子育て支援を中心にした第2の人生を送ろうと思ったとともに、そのすばらしさを伝えてゆきたいと、あらためて感じました。



助産師として、地域で支える 子育て支援

取得資格



地域における助産師の役割とは？

群馬県安中市に住む佐藤さんは、地域の助産師としてベビーマッサージやヨガを通して、子育て支援の活動をしています。出生率が減少する中、育児に困難を感じているママたちに向けて、心身のケアとサポートを提供することを目的としています。

少子化だからこそその子育て支援の必要性

安中市の出生率は人口1000人あたり3.87と低く、減少傾向を示しています。令和5年の出生数は214人でした。それに加えて新型コロナウイルスの影響で、ママたちとの交流の場は減少し、オンラインや、対面でもソーシャルディスタンスが守られた場が増えました。このような状況下で親同士のつながりが希薄化し、地域での育児サポートがますます重要になっていきます。

ママたちからは、「サポートを得られる場が身近にいない」「実家が遠くて、夫婦共働きで頼る人がいない」といった声が上がっており、子育てをする親の孤立が深刻化しています。また、子育てに関する心配事が多岐にわたり、インターネットで調べて余計に不安になってしまうという



ケースも増えていきます。出産後の不安や産後うつで、育児に対する期待と現実のギャップを感じるママたちに、どうやって支援を届けられるかが大きな課題です。

いまだに存在するパパとママの育児 ギャップ

佐藤さんは、支援活動をする中で、パパとママの育児における違いに気づきました。例えば、パパは赤ちゃんの泣き声に鈍感であったり、育児の負担をママに任せきりにしたりする場面が見受けられます。ある家庭では、パパが仕事から帰ってきて、自分のペースで過ごした後、夜11時になって赤ちゃんをお風呂に入れていました。このような育児に対する理解が乏しいケースが見られます。

また、夫にミルクを頼んだら、やり方がぎこちなかったり、赤ちゃんに「何で飲まないんだよ」と言ったりするのを見て、「自分でやった方が楽だ」と言うママもいます。そのことを夫に話しても「俺だって頑張っているのに・・・」などと言われると、それ以上は言えないようです。ママは、夫と話して共有したいと思うけど、十分に話せていないのが現状のようです。

最近では、パパの育児休暇の取得率が上がっていますが、実際の育児時間におけるママとの格差は依然として大きいのが現実です。このような背景を受けて、佐藤さんは、ママたちが安心して育児に取り組める支援だけでなく、パパの育児参加を促すことにも取り組んでいます。

親子の関係性を深め、心を育てる ベビーマッサージ教室

佐藤さんは、助産師としてアタッチメント・ベビーマッサージやキッズマッサージ、アタッチメン

ト・ヨガを取り入れ、教室をとおして、ママたちに交流の場を提供し、育児の悩みを解消することを目的に活動を行っています。

この活動は、赤ちゃんの成長に良い影響を与えるだけでなく、ママ自身の心身のリラックスにも繋がっています。ベビーマッサージは、赤ちゃんとのスキンシップによって、迷走神経が刺激され、副交感神経が優位に働き、その結果心拍数が減少し、リラックス効果や消化器、内分泌系の働きも良くなります。また、オキシトシンの分泌が促されることで、精神が安定し、心が癒され、親子の絆が深まります。

特に、足のマッサージでは、赤ちゃんが気持ちよさそうに身を委ねる姿が見られ、ママもリラックスした表情を見せます。参加者からの「利用して良かった」という声も多く、赤ちゃんの眠りが深くなったり、便秘が改善されたりと、効果を実感するママも多いです。



未来を見据えた支援活動の重要性

また、支援センターで行っているアタッチメント・ヨガ（ベビー&ママヨガ）も、参加者から好評を得ています。赤ちゃんがママと同じポーズを取るなど、和やかな雰囲気を作り出しています。

また、この教室では、保育士が2人ついていて、赤ちゃんがグズってしまったときに、抱っこをしてなだめてくれます。おかげで、ママは赤ちゃんをお任せできます。これには、「安心して自分の時間を持つことができた」「リラックスできた」との声が上がっており、リピートにつながっています。

このように、アタッチメント・ヨガは親子の絆を深めるだけでなく、ママの心身のリフレッシュにも貢献しています。

母親の心身を癒す育児支援

子育て支援が必要な家庭は増えているなかで、佐藤さんが行っているベビーマッサージやヨガは、親子の絆を深め、ママたちの心を癒すという形で、大きく貢献しています。

佐藤さんは、これからも、こうした活動をとおして、ママたちの孤立感を解消し、より多くの親が支え合いながら育児を楽しむための大切な場を提供してゆきたいと考えています。

広島からひとこと

今回の佐藤さんの発表では、助産師としての視点から育児における男女の実態が論理的かつわかりやすく示されており、非常に意義深い内容でした。

特に、男性の育児休業取得率が上がっているものの、現場での実際の父親の関わり方にはぎこちなさが残っている点や、育児に費やす時間が母親と父親で大きく異なる点が指摘され、興味深く感じました。このような状況は、10年、20年前から変わっていないところが多く、数値としての改善が進んでいても実態が伴っていないことを改めて実感させられました。

これからの社会では、父親が母親と同じように育児に関わるようになる必要があります。「ベビーマッサージ」は、その第一歩として大きな可能性を秘めています。

父親のベビーマッサージの取り組みをとおして、父親も、母親と同じテンションで育児をするようになることを期待します。佐藤さんの発表は、これからの子育て支援の方向性を考える上で、非常に深い示唆を与えてくれました。ありがとうございました。





優秀実践者表彰式・ 実践発表への感想

実践者の方々の活動発表を生で聞いたのがはじめて（いつも広報誌で読ませていただいていたのみ）だったので、熱量を感じられて刺激になりました。ベテランの先輩方が頑張っているのを聞いて50代も頑張らねば、と思いました。

保育教諭 50代 宮城県

お二人とも長期にわたるご活躍をされていてベビーマッサージへのモチベーションが改めて上がりました。地域に1人でもこのような方々がいらっしゃったらお母様方も心強いと思います。

保育士 30代 栃木県

佐藤様の発表は論理的なことを、統計をもとに伝えられていたのでとても分かりやすかった。岩野様の発表は、年齢的にも私の目標になりました。（2足のワラジ）エピソードを用いてベビーマッサージをされている背景やご家族のことも伝えられての発表は、ベビーマッサージの資格を持っていない私でも良く分かった。

フリーランス 50代 熊本県

母の悩みの実情を聞いてよかったです。ふれることの大切さ、ふれることは愛することの声かけまねさせていただけます！一人子育てにならない支援活動を目的として活動されていること、私の第二の人生のテーマにしたいなと思いました。ありがとうございました。

子育て支援事業 40代 東京都

優秀実践者の方々のお話は、実際に活動されていて、その活動からの体験やご本人が感じてこられたことなどの話なので、毎回得るものがあります。活動を継続されていて、それがまだまだ広がっている事が本当に素晴らしいと思います。

子育てサロン運営 60代 群馬県

スライド作成がわかりやすく、ていねいだと思いました。産後うつは10人に1人の割合、調べる場所が違えば6人に1人の割合というのに驚きましたが、実際保育園でも育てられないお母さんが増えていて、そのお子さんがクラスで問題視されているケースが多いです。

子育て支援センターでのベビマ活動が続ける難しさが、出生率低下にあるというのは日本全国での悩みだと思います。

「アタッチメントと安全基地」、「人間形成における土台づくり」をレッスン時に必ずお伝えすることは、必須だと感じさせて頂きました。

実家を支援金で改築し、ベビマサロンにしているというお話は、今後の自分にもあり得ると感じました。

「参加者が1人になっても続ける」という信念は真似していきたいところです。

保育士 60代 神奈川県

近い年齢の方が、地域の中でいろいろな取り組みや実践され、わかりやすくお話しされて大変参考になりました。

今の状況や地域の中で、自分にできる子育て支援のできることを少しずつでも一歩進めていけたらと思っています。

子育て支援事業 70代 東京都

岩野しのぶ様の発表から、ママ達に「肌は覚えている」という言葉かけはインパクトがある言葉だなと感じました。と同時にアタッチメントの重要性を話していくことがいかに大切かを学びました。

助産師 60代 群馬県

お二人のパワーがすばらしいと思いました。たくさんの方、パパ、ママ、そして赤ちゃんへ愛情を伝えていくことの大切さ、動き出すことの勇気をもらいました。

看護師・公認心理士 50代 東京都

このほかのご感想はこちらから
ご覧いただけます！





ランチミーティング



今年も「3pm さんじ」さんの「彩りを食べるお弁当」で、ランチミーティングが始まりました。対面会場には、多くの方が参加していただいたので、とても盛り上がりました。オンライン参加の方も、ブレイクアウトルームにそれぞれ入っていただきました。その様子はコチラで観ることは出来ませんが、オンライン飲み会のような感じで歓談されたことと思います。

今年のテーマである「同窓会」の名にふさわしく、わたし自身、数年ぶりに再会した方が何人もいました。「この数年は、顔を出せていませんでしたが、会報誌はいつも読んでいました」と言っていたのは、本当にうれしかったです。各テーブルでも、似たような会話がなされていました。

ここで他の参加者と歓談したことは、じつは本人が気がつかないところで刺激になっていたり、ヒントになっていたり、悩み解決になっていたりします。これを「場の効用」と言いますが、全国大会では、これが頻繁に起きます。このテンションで、つぎのお悩みスーパーバイズに向かいました。

お悩みスーパーバイズ 2024



「噛みつき」をする2歳半の男の子に、 どのように関わればよいのでしょうか？

■ オンライン参加の篠崎さんからのご質問です

さきほど、グループでとても盛り上がりました。わたしは、小児科の看護師をしています。いまは、病児保育室で勤務しています。風邪をひいて登園できない子が、一時的に来るところです。となりの保育園が併設している施設なので、病児保育が必要な園児がいないときは、保育園のヘルプに入ります。

その2歳半の男の子が、毎日のように、おともだちに噛みついてしまい、大きな問題になっています。わたし自身は、昨日のスキルアップ講座や、今日の宮島先生のお話を聞いて、「厳しく叱る」というのは、違うと感じています。では、どのようにしたら、その子にとって良い関わりができるのか、と考えると、その答えが見つからずモヤモヤしているので、アドバイスをお願いします。

『厳しく叱るのは違う』という直観は、正しい

グループの方たちからのアドバイスでは、「叱るのは違うよね」という意見がありました。また、いつも同じ子が噛みつかれているため、「噛みつかれる方にも、何かしらの原因があったのかもしれない」とか、「問題の渦中に入っちゃう子はいるよね」などの視点ももらいました。ちょっと危ないと思う瞬間があるので、それを逃さずに、噛みつきが起こる前に防いであげられないか？あるいは、その子がパニックになっているときに、その場で言って聞かせるのではなく、ふだん落ちついているときに、「〇〇のときは、こうするといいよね」と好ましい行動を言って聞かせることもできるのではないかと。そんなアドバイスをもらいました。



グループの方のアドバイスは、どれも適格だと思います。とくに、「噛みつきが起こる前に防ぐ」とか「好ましい行動を言って聞かせる」という対応は、今日の宮島先生がお話しされていた応用行動分析にもつながる考えだと思います。同じく、宮島先生のお話にも「否定語を使わない」というのがありますが、まさにこのケースで当てはまります。『厳しく叱るのは違う』という篠崎さんの直観は、その意味で正しいです。

「噛みつき」行動の本当の意味とは？

そのうえで、話しの取っ掛かりとして、わたしが、こんな質問をしました。

「その子は、どんなシチュエーションで噛みついてしまうのですか？」すると・・・

「自分の思いどおりにならなくて、手当たり次第に噛みつきます。先生であることもあるし、近くにいた子どもの場合もあります。おもちゃに噛みつくこともあります。」

ここで、この子の「噛みつき行動」について考えてみましょう。まず「噛みつき」の衝動を引き起こす一番の要因は、「おっぱいへの郷愁」です。つまり、0・1歳の時に「もっとおっぱいを吸いたかった」という未練や郷愁が、今も残っているのです。心の中に、その時の「さみしい」気持ちを抱え続けているのです。それが、幼児期の「噛みつき」として表面化します。

2歳半という年齢を考えると、本当は、ふたたびお母さんがおっぱいを吸わせてあげるのが、一番良いのでしょう。しかし、これはお母さんの卒乳や断乳に対する考えもあると思いますので、保育者の努力だけではどうすることもできません。

保育者として、この子に何がしてあげられるのか？

では、保育者の立場で出来ることを考えましょう。発達心理学では、「おっぱいが足りていない」ので、「おっぱいを吸う」段階まで戻って、その子に対応してあげる、という考え方をします。つまり、0歳児にしてあげることを、その子にしてあげるということです。



これがわかれば、具体的な対応は簡単です。「ギューっとしてあげる」、「ベビーマッサージをしてあげる」といったことになります。服の上からでも効果は充分にあります。その際は、さするのではなく、ポンポンと手を当ててあげるようにします。その際に、誰がマッサージするかが重要です。できたら、その子が一番身近に感じている担任の先生などが望ましいです。

この子の「さみしい」を包みこむ対応

もし、その子が、次に嘔みついてしまった時は、本人もおそらくパニック状態だと思います。そんなときは、できれば前から「ギュー」してあげてください。この時の「ギュー」は、愛情ある包み込みによって、パニック状態を抑える意味がありますので、少し強めにしてもよいでしょう。

そのうえで「どうした？なにが嫌だった？」と声かけしたあと、子どもが落ち着いてきたら、「でも〇〇くんが嘔みついたら、先生かなしくなっちゃうな～」などと声かけしてください。

前半の声かけは、無条件に受容したうえで、言い分を聞く対応です。そして後半の声かけは、嘔みつきを抑制・制御するための布石です。つづけて「もし嫌な気持ちになったときは、先生とギューしようよ！ そうしたら、嫌な気持ちがとんで行って、楽しい気持ちになっちゃうよ！」などと「楽しい」声かけします。これが、ポジティブな約束になります。この約束は、この子が日常で「ギュー」されたり、マッサージをされたりすることで、充分有効に機能します。



未満児への「しつけ」は、恐怖とトラウマを与えるだけ

ちなみに、「強く言って聞かせる」のが間違いなのは、宮島先生もご指摘されていたとおりです。この子は、2歳半ですので、強い口調や厳しい叱りは、恐怖しか与えません。「叱る」が機能するのは、少なくとも3歳を過ぎてからです。恐怖は、マイナスにしか作用しません。本当に危険な行動だった場合、3歳を過ぎていたら強めに叱ることもあります。しかし3歳未満なら、むしろ気をそらす程度にして、そういう状況が起きないようにすることが重要です。「道路へ飛び出したらダメ！」と強くいっても、その原因と結果の論理は伝わりません。そういう認知機能はまだ育っていないのです。

保育士のちょっとした対応で、子どもも親も大きく変わる

この子は、まだ2歳半なので、この問題行動がこれから良転していくことは十分に可能です。保育士さんのちょっとした対応だけでも、大きく変わります。さらに、ここで起きた良い変化は、お母さんにも影響します。その際、「こうしたら、こう良くなった」ということをお母さんに伝えます。「いま、じつは〇〇くん、毎日マッサージしているんですよ。マッサージするようになってから、〇〇くん、本当に落ち着くようになったんですよ。」「簡単なのでお母さんも、やってみませんか？こんどやり方お教えしますよ。」といった感じで、お母さんを巻き込むことで、この子の家での環境も良くなるのが期待できます。





お悩みスーパーバイズの感想

皆さんの話がすごくすごく勉強になりました。おっばいのごこと、パパベビマのごこと、普段お客さんとよく話すテーマなので、すーっと入ってきました。パパベビーマッサージは定期的にやっています。父性の特性をもっと加えて話したり、抱っこチェックもしてみようと思います。ありがとうございました!!

子育て支援事業 40代 兵庫県

初めてお悩みスーパーバイズに参加しましたが、すぐに打ち解けることができ、楽しい時間となりました。異業種の方と、子どもって、保護者って、と語り合うことは不思議な経験でした。子育て支援者として、色々なフィールドを持った人たちが知恵を出し合うことは、意見が偏らず思いもよらない発見があり、良いことだなあと感じました。

認定こども園保育士 50代 新潟県

現在自分一人で親子教室を運営しており、日々運営内容が正解なのか自問自答しながらすごしているため、他の方々のご活動を伺って、明日からの活力になりました。

親子教室 50代 東京都

同じような悩みを持った人がどうしているか、その解決のヒントをみなさんからいただくことができ、大変有意義でした。

助産師 50代 神奈川県

グループの方との交流ではメール交換をして、今後情報の共有をしたいと思います。

若い方の「主体性を重んじる保育」の難しさや母親としての子育ての悩み（4歳児の反抗期）を聞かせて頂きました。保育園から小学校への入学に向けての連携の悩みも聞かせてもらいました。行政の力も借りながら解決していけたらいいよね。と話をしました。

保育士 50代 熊本県

様々なバックグラウンドを持ちながら、みなさん心から子どもを愛し、よりよく育てることに意欲的な方々ばかりなので、初めて会話しても、どこか心は通じ合っている気がして…何だか不思議な感覚を覚えました。初めてお話するお相手なのに、もっと話したくて仕方がなかったです。お悩みスーパーバイズでは、最近悩んでモヤモヤしていたことがクリアになったと同時に、それで間違っていないよってみんなに背中を押された気がして、次の日から自信を持てるようになりました。今回オンラインでの参加だったので、不安でいっぱいだったのですが、思い切って参加して良かったです!ありがとうございました!

保育士 30代 栃木県

オンラインでのおしゃべり&交流タイムは恥ずかしいし、緊張するし嫌だなあ、と思っていました。しかし、初日の自己紹介でその思いは吹き飛びました。全国のいろいろな人と話す事はとても楽しかったです。

看護師 60代 徳島県

おしゃべりタイムは、ざっくばらんに話せて細やかな疑問がスッキリしました。笑

一つの悩みをみんなで考えるっていいですね。視野が広がる感覚を覚えました。

初めて参加しましたが、色々な方、考えに出会える場所で、楽しかったです。ありがとうございました。

保育士 60代 東京都

近い年齢の方が、地域の中でいろいろな取り組みや実践され、わかりやすくお話しされて大変参考になりました。

今の状況や地域の中で、自分にできる子育て支援のできることを少しずつでも一歩進めていけたらと思っています。

子育て支援事業 70代 東京都

このほかのご感想はこちらからご覧いただけます!



スタッフより あとかき



桑山 美樹 (事務局長)

今年のスキルアップ講座は、アタッチメント・ベビーマッサージの講座リニューアルでした。対面とオンライン併せて90名の方に受講いただきました。10年以上前に受講された皆様にもお会いできて、とても楽しい時を過ごすことができました。



塩澤 美月 (事務局)

今年はいじめて司会をさせていただきました。不慣れで皆様にご迷惑をおかけした部分もあったかと存じますが、温かく見守っていただき、無事に終えることができました。ありがとうございます。

直接皆様とお会いできる全国大会はとても楽しい時間です。今年はどうな方が参加されるかな？と申し込みが始まるとワクワクしています。



松尾 彰俊 (システム)

スタッフの松尾です、久しぶりに全国大会に参加しました。見通しが良い会場で季節的にも涼しくなっていました。皆様の熱気を感じた1日でした。

会場のマイクの調子が悪く、少しもたついた場面もありましたが、無事終えることができ安心しました、2025年も皆様の活躍をお祈り申し上げます。



花田 光代 (事務局)

ベビーマッサージ講座の新カリキュラムということで、たくさんの方にご参加いただきました。資格は随分前に取得したけれど、ここからまた始めていきたいとおっしゃる方もいて、あらたなスタートの良いきっかけになっているんだなと思いました。

私のご活動をインタビューさせていただくこともありますので、さらに今後の皆様のご活躍が楽しみです。



富田 桃花 (インターン)

みなさまの真摯に学ぶ姿を見て、私自身も新しい知識に対して貪欲でいたいと強く感じました。アルバイトという短い期間でしたが、皆様と関わ

れたこと、とても嬉しく思います。ありがとうございました。



二村 夏音 (編集)

今回、初めて全国大会に携わらせていただきました。受講生の方と実際にお会いする初めての機会でしたが、楽しそうに交流されている姿や、ご活動されている方の熱意を感じることができ、参加できてよかったと思いました。また、当日はお片付けにご協力いただいた場面もあり... パワフルな優しさに救われました。



東京家政大学と細井先生のご縁で宮島先生と出会ったことは、間違いなく、わたしの人生の後半における大きな収穫だ。今年の全国大会を終えて、そんなことを思った。この出会いは、10年前では早すぎたし、10年後では遅すぎる、今なのだ。

宮島先生は、人間くささと独自のこだわりをもったヒューマニストだ。小児科医でありながら、精神医学や心理学、おそらく社会学にも精通し、今も学びの手を止めずに、発達障害の臨床の現場の第一線におられる。

わたしの人生の後半も、先生のように、他分野に精通し、学び続け、現場に身を置く人生を歩みたいと思った。そのためのロールモデルを得た。わたしは、わたしらしく、かつ宮島先生的でありたい。そう思った。

(社) 日本アタッチメント育児協会 理事長 廣島 大三



発行：一般社団法人 日本アタッチメント育児協会

本部 愛知県名古屋市熱田区金山町1丁目13-14 アールワン金山 3F
アタッチメント・アカデミア 東京都文京区春日2-10-15 志知ビル 7F

URL : <https://www.naik.jp> E-mail : info@naik.jp

TEL : 052-265-6526 FAX : 052-265-6529

発行日 2025年1月14日